

Hallo Deutschland! に参加して

滴草 拓磨

1. はじめに

昨年、Goethe Institut によって第一回 Hallo Deutschland! が催された。コンテストの概要は、「日本の小学生に、ドイツやドイツ語に興味をもってもらうためにはどうしたらいいでしょう?」というテーマで、小学校での授業を組み立てるといものである。参加対象はドイツ語を学んでいる大学生もしくは専門学校生のペアであった。

この報告書では、コンテストの流れに沿って、コンテストを通じて何を学び、何を考えたのかを振り返って行くこととする。

2. きっかけ

私がこのコンテストを知ったのは、全カリの上級ドイツ語コミュニケーションの授業内である。Kathalina Muelenz 先生が授業の初めにチラシを配ってくれたのがきっかけだ。

私はちょうど半年間のドイツ留学から帰ってきた時期であり、帰国後さらにドイツの魅力を感じている時期でもあった。コンテストに参加しようと思ったのは、その魅力を子供たちに伝えたいと思ったのはもちろんのこと、自身の留学経験を見つめ直すいい機会になると考えたからである。

さらに、コンテストの優勝者、準優勝者にはドイツで行われる特別コースの参加資格が与えられるとのことであった。特別コースの内容はよく知らされていなかったが、『交通費、滞在費支給]

と明記されていた。これも参加理由のひとつである。

3. 選考

選考は第一次から第三次までであった。それぞれ順を追って説明していく。

第一次選考では、志望理由をドイツ語で A4 に 1 枚程度と、授業内容を A4 に 4 枚程度に簡単にまとめたものを提出するというものであった。事前に Muelenz 先生にも参加することを伝えていたため、自分で用意した原稿を先生にチェックしてもらい、文法的な間違いを指摘して頂き、さらによりネイティブに近い表現などを教えてもらうなど先生には大変お世話になった。授業内容は、スカイプを用いて現地のドイツ人と直接コミュニケーションをとってもらい、海外を身近に感じてもらうと共に、現地小学生が放課後何をしているかという内容のプレゼンテーションをするというものを提出した。

先生のおかげもあり、第一次選考は通過した。後に聞いた話だが、応募数はおよそ 30 組で、第一次選考を通過したのはそのうちの 5 組ということだった。

続いて第二次選考である。ここでは、東京の青山にある Goethe Institut に行き、志望理由とそれに対する質疑応答をドイツ語で、授業内容を日本語のプレゼンテーションで発表するというものであった。ここでも、先に提出した志望理由書をより話し言葉に近い形にするのに Muelenz 先生に助けていただ

いた。プレゼンテーションの方法は各ペアに任されており、私達はパワーポイントを用いて授業の進行内容を図式と写真を用いて説明する形をとったが、他のグループでは実際の授業のように、学生役と児童役で実演する方法をとっているペアもいた。

私達が第二次選考において最も力を入れた点は、スカイプを用いて小学校で授業するという新しいことが、準備さえすれば可能であり、それは子供達にとって海外に目を向けるのに大きなきっかけになる、ということである。今までにない形式には不安が付きものであり、ネット環境は整っているのか、機材の故障はないのか等、実現の可能性についての言及が多くあった。しかし、Wi-Fi ルーターを持参し、事前に機材の確認を入念に行い、また万が一に備えて機材は複数用意するなどの解決策を提示することで、Goethe Institut 側にも理解していただくことができた。

無事、第二次選考も通過し、最終選考となる第三次選考に進んだ。ここでは、今まで計画してきた授業内容を、実際に小学校に行き実践し、児童の反応や進行具合を見て Goethe Institut の方と学校の先生方に評価してもらうというものであった。

授業内容はそれまでに入念に計画してあった為、ここで必要になったのは機材を借りる許可をとること、スカイプ相手を見つけ、調整することであった。機材の方は相方に任せ、私はスカイプ担当となった。留学していたこともあり、ドイツ人の友達はいくらでもいたので、相手を見つけることはそう難しいことではなかった。問題は時差である。

ドイツと日本では8時間の時差があり、授業は日本時間の9時～12時にかけて3コマと、予想よりも長時間に及ぶものであった。よってスカイプ相手

を複数見つけ、それぞれの負担をできるだけ減らすよう調整した。

当日は、スカイプ相手のうちの一人が日程を間違えてしまい、結果的に他のスカイプ相手の負担が増えてしまったが、授業自体に支障はなく、子供達も様々な質問を投げかけてくれた。質問は子供達が考えたものを、私がドイツ語に直して、子供達がドイツ語で直接質問するようにし、ドイツ語での返答を私が日本語に直して伝える、という形式で行った。

この形式をとるに当たって、一番大事なのは子供達の意欲であった。しかし、私達の心配をよそに、立教小学校の児童達は次々と質問を投げかけてくれた。時間が足りず、全員の質問に答えられなかったのが残念であったが、彼らの積極的な参加のおかげで私達のプレゼンテーションは大成功のうちに終わった。

4. まとめ

結果は3位入賞にとどまり、ドイツに行くことはできなかった。しかし、プレゼンテーションを通じて私は主に2つの大切なことを再認識した。

1つ目は、留学中に出会った友人とのかけがえのない繋がりである。彼らは貴重な時間を割いて付き合ってくれた上に、レッドブルを飲みながらスカイプに応じてくれた。何より時差の問題があるので、調整と一言に言っても互いの日程が合わないことが多々あり、その度に相手が私に合わせてくれると申し出てくれた。このような友人を持てたことはとても幸運なことであるし、これからも大切にしていきたいと改めて考えた。

2つ目は、子供達の新しい文化に対する好奇心である。真新しい文化に触れている間、彼らは非常に楽しそうにし

ており、生き生きとしていた。次々と投げかけられる質問それぞれが、純粋な好奇心から来るものであった。このような状況を目の当たりにし、私自身がドイツに降り立った時の興奮を思い返し、好奇心というものがいかにその人の原動力になりえるかを再認識した。

これらの他にも様々なことを考えたが、まずこのコンテストで3位入賞を獲得できたのは、ひとえに周りの方々の協力のおかげである。Muelenz先生を始め、立教小学校に連絡してくださった新野先生、様々なアドバイスをいただいた山田先生、貴重なお時間をいただいた立教小学校の遠山先生と長畑先生、そしてスカイプに応じてくれた David と Aaron に感謝を述べて報告を終わりにする。

しずくさ たくま

(本学異文化コミュニケーション学部
異文化コミュニケーション学科3年次)